

防災と地域コミュニティ

愛媛大学附属高等学校 1年 外田桜花

○はじめに

1月1日に能登半島地震が起きたというニュースを見たとき、とても驚いたことを覚えている。犠牲者として石川県が氏名を公表している死者は129人であり、そのうちの7割は65歳以上の高齢者だった。主な原因は後継者不足による住宅の耐震化が遅れていたことである。きっと誰も正月に地震が来るなんて想定していなかっただろう。そのような状況で、冷静に行動できた人はどれだけいたのだろうか。

今回は防災の三助と言われている自助・共助・公助の中の自助と共助を中心に、現代社会に即した防災や、地域コミュニティづくりについて考える。

○地域コミュニティの現状

都市部では、人口が多く経済活動は活発だが、長期定着人口や居住地の昼間人口が少ないため、地縁的なつながりや共通の価値観は希薄である。過疎地では、農林漁村が多く、地縁的なつながりは比較的強いが、地域経済の縮小、人口減少、高齢化などによりコミュニティの維持が困難な場合がある。図1にあるように、地域コミュニティは年々減少している。

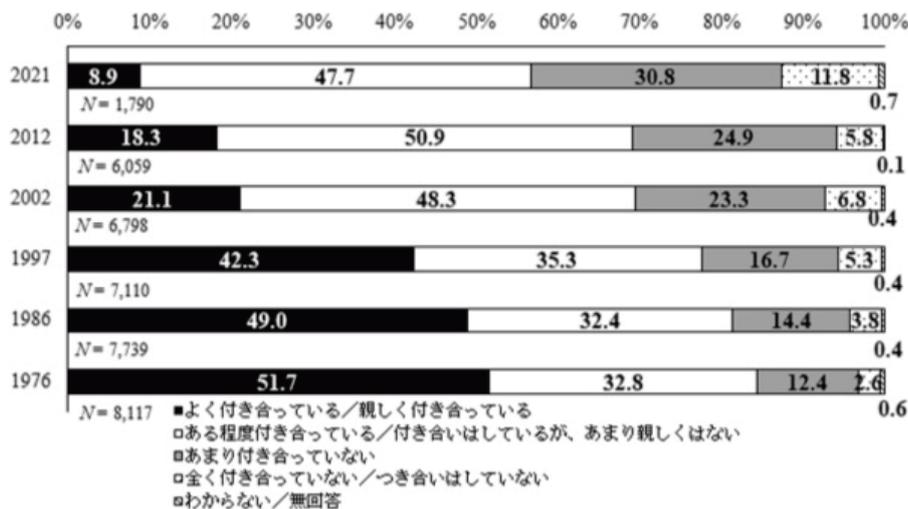


図1 地域での付き合い程度

○現代社会の課題

図2から、一人暮らしをしている人が全体的に増加しており、特に女性が多いことがわかる。また、65歳以上の一人暮らしをしている人も多く、今後も増加していくと予想されている。65歳以上の一人暮らしの割合が増加するにつれて、孤独死も増加している。一人暮らしの高齢者が増えるにつれ、地域コミュニティから孤立していることが課題として挙げられるようになった今、孤立する高齢者を減らすために、地域コミュニティの在り方をもう一度考え直すべきである。

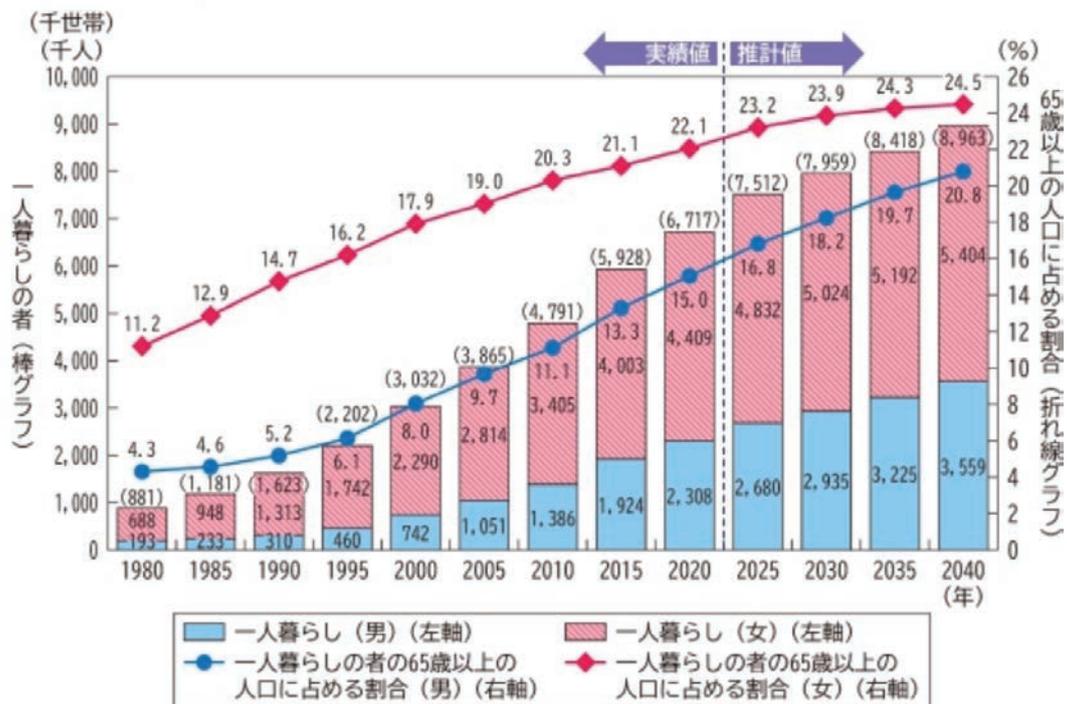


図2 65歳以上の一人暮らしの者の推移

○目指す地域コミュニティの姿

誰一人孤立しない。イベントなどを定期的にする。そして何より、だれでも活躍できる環境にすることが大切であると考えている。高齢者だから何もできないわけじゃない。それぞれの得意分野で活躍することで、若者との交流や生きがいにつながる。そして、地域コミュニティを持続させるためには、自分たちの地域をよく知り、それぞれに合った形にする必要がある。高齢者の多い地域では声掛けをして積極的にイベントなどに参加してもらったり、働いている人が多い地域では休みの人が多い日にイベントが開催できるようアンケートを取ったりする。それにより、住民同士の交流とともに地域コミュニティの活性化につながる。

○防災からより良い地域コミュニティへ

より良い地域コミュニティにするために防災イベントの充実が鍵になると考えている。

現在の松山市の自主防災組織では、講演や炊き出し、起震車体験などの活動を行っている。防災カルタなども行っているため、子供も参加しやすく、楽しみながら学べるのはとてもいいと思ったが、実践的な活動が少ないのではないだろうか。せっかく講演や炊き出しなどの活動を行っているが、避難所での生活などを体験することができないのはもったいないと思う。そこで私は、普段の活動をより実践的なものにし、自主防災組織に入っていない人でも参加できる4つの防災イベントを考えた。

今まで行っていた炊き出しや、起震車などの実際に体験できるものは継続しても良いと考えるが、講演は一方的に話をされて、受け身の状態になってしまうため、普段の活動として、避難所で使えるライフハックを体験するという活動を考えた。避難所に集まってもらい、冬であれば簡単に温まる方法や、新聞紙を使ってできることなどのライフハックを実際に体験してもらう。

防災イベントの1つ目は、情報を共有し、スタンプラリーをするというものだ。図3から、災害時の情報源としてスマホを使っている人の割合が増加していることがわかる。そこで、スマホに慣れていない人にも上手に使えるようになってほしいという思いから、スマホを使ったイベントをしたいと考えた。また、計画を立てたり、クイズを一緒に解いたりしていく中で、地域全体で絆を深めてほしいと考えた。

イベントの内容は以下の通りである。学校を借り、グループ分けをする。そのグループで一緒に行動するのか、分担してクイズを解き、答えを共有するのは自由とする。専用のウェブサイトに番号を打ったら簡単なクイズが出るシステムにし、そのクイズの答えになる学校のある場所に行き、そこに書かれた新たな番号を打つ。正解していればスタンプを押し、次のクイズに挑戦する。最終地点にはグループの全員がそろって来ることとする。



図3 災害時の情報源

2つ目は、地域全体を使って危険な場所を探すというものである。いくつかのグループごとに危険な箇所を探す範囲を決め、専用のアプリで写真と実際に何が危険なのかを書く。ポイント制にし、最後に一番高かった人には景品を渡す。このイベントを行うことで、自分の地域のことをよく知り、避難する際にも役立てることができると考えた。

3つ目は、災害図上訓練DIGである。2つ目のイベントで見つけた危険な個所や自分の地域で起こりうる災害について話し合い、地図に書き込み、自分たちの避難経路などを見直す機会にする。2つ目のイベントで別れたグループとは別のグループを作ることによって自分の調べていない範囲の危険な個所を知り、新たな気付きを得ることができる。

4つ目は、実際に避難所での生活を一日体験するというものである。防災バックを持ち、集合時間までに避難経路を通ってくる。その後の食事は非常食か炊き出しで過ごす。ライフハックなどの防災クイズを出し、実際に体験する。自主防災組織の人で、一度やったことがある人は周りに教えながらする。夜は実際に避難所で寝る。ほかの人と寝たり、非常食を食べたりするなどの非日常を体験することで、地域全体の防災への意識を高める。

4つのイベントを通して、孤立する人をなくし、「地域全体で協力する。誰一人見捨てない。」そんな思いを持って全員に持ってほしい。そして、ただ体験するだけでなく実際の災害時に活用できるよう、イベントの意味をしっかりと考えてほしい。

○おわりに

知っていることが多いほどより鮮明にイメージし、余裕を持って行動することができる。だからこそ、防災イベントなどを開催し、住民同士でいい関係を築き、地域コミュニティを広げていくことが重要である。災害はいつ起こるか予測できるものではなく、避けられる出来事でもない。だからこそ地域コミュニティの在り方を見直し、改善していかなければならない。また、高齢化や過疎化などが進んでいる地域ではイベントをするなどの新たに活動を始めることは難しいかもしれない。しかし、今あるものをよりよくすることはできるはずである。それぞれの地域の良さを知り、課題に目を向け、持続的な地域コミュニティをつくっていくことが重要だと考える。

「あの時やっとならばよかったと後悔する前に、後戻りできなくなる前に行動する。自分の未来は自分のものだけではない。大切な人を悲しませないためにも今行動する。」そんな思いを持って防災について真剣に考え、取り組んでほしい。

○参考文献

- ・能登半島地震：能登半島地震 石川死者7割、65歳以上 高齢化、耐震進まず | 毎日新聞 (mainichi.jp)
- ・令和6年版高齢社会白書(全体版)(PDF版) - 内閣府 (cao.go.jp)第2章 第1節 (2) 高齢者を取り巻く社会環境の変化 | 消費者庁 (caa.go.jp)
- ・【日本防火・危機管理促進協会】高齢者・障害者の防災施策に関する調査研究.pdf
- ・【愛媛大学 愛媛県】水害・土砂災害からの避難についてのアンケート.pdf
- ・【減災調査 2022】災害時の情報入手はスマホへ、若者ほどテレビ・ラジオ離れが顕著 | Weathernews Inc.